

別紙 2

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山口 早苗

日中戦争期（1937-45年）において日本の占領下に置かれた中国の「傀儡」政権に関しては、中国国民党統治区（重慶政権）や中国共産党統治区（延安政権）から相対的に自立した政治空間として、1990年代から本格的な研究が始まった。また、孤島期（1937-41年）およびアジア・太平洋戦争期（1941-45年）の上海の政治・社会や文化の実態については、都市史の変遷という視角から、近年さまざまな研究が蓄積されつつある。本論文「日本占領期上海文壇再考—中華日報社と中国文化人—」はそうした動向を踏まえて、対日協力政権（汪精衛国民政府）のなかで活動した文化人の思想や文学の営為を、文壇全般の状況と関わらせながら実証的に考察しようとするものである。

これまで大陸中国や台湾において、対日協力者と目される文化人や知識人への評価は、ナショナリズムやイデオロギーの制約もあり、「親日文人」「文化漢奸」として否定的な評価が下されるのが通例であった。だが、本論文は日本の中国侵略・占領にたいする「協力」と「抵抗」の境は自明でも固定的なものでもなく、曖昧で流動的な空間が広がっていたとする「グレーゾーン」論の問題意識を受け継ぎつつ、汪精衛政権の機関紙『中華日報』の文藝欄に見られる執筆活動や編集方針を、文化人たちの主体性と自律性をともなった抵抗の一環として定位しようとする。

論文は、序論・終章を含めた6章からなり、参考文献と付録「『中華副刊』記事総目録」を付す。本文は図表を含めてA4判で全137頁あり、参考文献と付録を含めると総208頁になる。以下、本論文の内容を紹介する。

筆者は序章で、日本占領期の上海で展開された文学活動に関する先行研究を整理した上で、政権機関紙であった『中華日報』の文藝副刊を対象に、中華日報社に集った作家や編集者の創作や思想営為を明らかにすることが、文壇の全体像を描き出すには不可欠の課題であるとの問題提起を行う。とくに、新聞文藝欄という、当時多くの読者を獲得したメディアに着目した点が、本論文の独創的などころである。

第一章「政治宣伝と娯楽の間で——『中華日報』文藝欄「華風」の考察」は、

『中華日報』の初期の文藝欄であった「華風」を取り上げ、その編集方針や紙面の変化を通じて、孤島期上海の文壇の一端を明らかにする。汪政権が求める「和平」を軸とした政治宣伝は当初ははなばなしく紙面を飾ったものの、長続きせず、やがて大衆向けの娯楽ニュースに混じって、純文学や演劇などの作品や評論が掲載されるようになった、と筆者はいう。

第二章「『中華副刊』に見る占領下の文学活動」は、日米開戦により、それまで相対的に自由な言論空間が保障されていた上海租界の状況が一変するなかで、『中華日報』文藝欄の「中華副刊」が広い読者に迎えられた背景を探る。筆者は「中華副刊」が「和平文学」を推進したとする通説は誤っており、鴛鴦胡蝶派と称される通俗文学や商業文藝誌とは一線を画した編集方針に「中華副刊」成功の要因があるとして、その文学的性格と特徴を抽出する。

第三章「陶亢徳と中華日報社——編輯者の側面に注目して」は、第一、第二章が文藝欄を考察の対象としていたのにたいして、実際に文藝欄の編集を担っていた陶亢徳の行動と思想に焦点をあわせる。陶は抗日陣営側の文化人とさまざまな接点があった人物であるが、1942年以降も上海に残ることを選択し、中華日報社系列の新聞や雑誌の編集に携わった。かれは自ら編集する文藝欄で政治宣伝色を薄め、文化・教育を主とした誌面構成をこころがけた。「間接的な抵抗」とも見られるその姿勢からは、戦時下の文壇の複雑で曖昧な「グレーゾーン」の状況が透けて見える。

続く第四章「日本占領下における楊之華の文学活動——上海文壇批判とその文学観」も、中華日報社系列の編集者であった楊之華をとりあげ、戦時下の上海の文壇状況を考察しようとするものである。楊之華は当時、文壇で突出した人物であったにもかかわらず、これまでほとんど注目されることがなかった。だが、日本文学の積極的な紹介、『文藝年鑑』の刊行、独自の文学的使命感などの点で、この時期の上海文壇のキーパーソンとも言える人物である。とくに、かれが中国文学のあるべき方向を探るなかで、五四新文学を回帰すべき原点と考えていたことは、「通俗文学」に対する「純文学」の擁護ともあわせて、戦時下における一つの文学的抵抗のかたちを示していると見られる。

終章では、各章の内容を要約した上で、歴史・文学・メディアの交錯した場として上海文壇を多面的に解説していく必要があること、また、文学メディアから「グレーゾーン」研究に新たな貢献をなしうることなどの結論が導き出される。

以上のような構成と内容をもつ本論文にたいして、審査委員会は、戦時下における文化人の対敵協力の問題をめぐる、歴史・文学・メディアなど諸領域の

研究に新たな知見と視座をもたらす力作であるとの点で見解の一致を見た。論文の学術的意義として特筆されるべきは、以下の2点である。

第一に、文藝副刊（タブロイド判文藝欄）という新聞メディアに実証的な考察を加えたことである。著者は「華風」「中華副刊」という文藝欄に着目し、あらゆる記事の整理・分析を行うとともに、紙面の変化や編集方針の推移、執筆陣や編集者の動向などを緻密に分析し、戦時下の上海文壇の一面を見事に切り取った。このことは、各章には含まれた記事目録や特集号一覧、および巻末の「中華副刊」記事総目録などの地道な基礎的作業にも存分にあらわれている。

第二に、「抵抗」と「協力」の狭間にあるグレーで曖昧な空間を、新聞文藝欄や雑誌の紙面構成を通じて、具体的に描出したことである。先行研究でも、日本占領地区に残った文学者や知識人の「沈黙」や「隠遁」「忍従」といった態度を「抵抗」の実践として読み解こうという試みはあった。だが、本論文ではそれとは違った角度から、政権に参与しつつも政治宣伝を巧みに回避したり、娯楽作品とは一線を画したりして、困難とは知りながら自立した文学空間を打ち立てようとする「間接的な抵抗」のかたちを抽出するのに成功している。これは、日中関係のみならず、言論人の戦争協力というより広い問題に一つの重要な示唆を与える点で、学术界にたいする本論文の大きな貢献といえる。

とはいえ、本論文に若干の瑕疵や不足がないわけではない。審査委員会では、汪精衛政権と敵対する重慶の国民政府（蒋介石政権）にたいし、中華日報社に集う文化人がいかなる認識や個別の関係性を持っていたのかについて疑問が呈された。また、論文中の通俗文学と純文学の分け方、日本の同時代文学の紹介の基準や経路についてはさらなる検討が必要であるとの指摘がなされた。

しかしながら、以上のような指摘は、本論文の学術的達成を損なうものではない。むしろ本論文が切り拓いた視圏により、今後の新たな課題が発見されたというべきである。

総括するに、本論文の達成が中国文学史、中国メディア史、中国近現代史、日中関係史等の領域に大きな貢献をもたらしたことは疑いない。したがって、本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定した。